

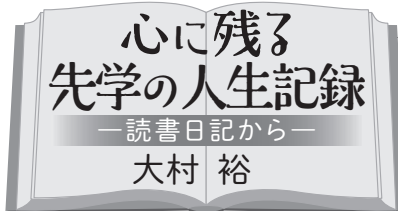
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.185
2019.2.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第8回

赤松啓介『非常民の民俗文化』

(明石書店 1986年)

赤松啓介(1909~2000年 本名:栗山一夫)は現在、民俗学の世界において極めて高い評価を受けている[ただし民俗学者の福田アジオによれば、本書刊行以前は「完全に無視されてきた」という(赤松啓介「復刻 民俗学」明石書店、1988年刊の解説文)]。しかし考古学分野ではそれほど高い評価を受けているとは言い難く、和島誠一との関係で名前だけは著名である。

『赤松啓介民俗学選集』第6巻(明石書店 2001年)の巻頭にある赤松の若い頃の写真を見ると、本当に弱々しい虐められっ子の風貌をしている。1939年、治安維持法違反を理由に拘束された折、取り調べの刑事たちに、指の爪と肉の間に太い木綿針をさされて自白を強要されても、なお「和島誠一」の名を出さなかったあの強靱な非転向の「主義者」のイメージはない。このどこか弱々しい風貌が、どこへ行っても「オバちゃん」たちから受け入れられた原因であろう。村に行ってもスラム街に行っても、零細な工場に行っても「オバちゃん」たちから可愛がられ、なぶられ、「接待」を受けている。一方男どもからは、村のはずれで石仏調査をしているところを見咎められ、ぶん殴られたり、追いかけて回されたりしているが、人に威圧感を与えない彼の風貌は、面識が出来ればどこの社会でも概ね好感を以て迎えられたであろう。

本書は「一人の男の、敗北と挫折の記録である」という。赤松啓介は兵庫県にて1909年に出生。幼少時から母子家庭に育ち、上級学校への進学は早くから諦めていたと述懐している。高等小学校卒業後は「証券屋」の給仕となるが、一か月でここを辞め、大阪の果物屋へ丁稚奉公に出る。しかし「肺炎カタル」に罹ったために故郷に帰り、養生することになった。この間、民俗学や郷土研究に興味を持つようになり、民俗採取を始めたようである。その後、母の勧めで夜間商業学校や昼間の工業学校に学んだが、赤松の性に合わず、途中でやめてしまう。学校で学ばなくなったため母親からの仕送りがなくなると、友人の手引きでヤシ稼業に入る。この稼業の関係でスラム街の人たちや「部落のひとたち」、「朝鮮の人たち」と接触するようになる。その後、大阪府の小学校準教員検定試験にパスするも、条件面が折り合わず、教員の途に進むことを断念、大阪中央郵便局の吏員となる。しかしここでおとなしく仕事をしていればいいのに、全協日本通信労働組合大阪支部の再建などに関わったためここを追い出されてしまう。その後も社会・労働運動に関わり、検挙・投獄が繰り返され、足掛け五年の留置場・刑務所暮らしを体験している。こうした波瀾に富んだ職業経験が彼独特の民俗学を育んだようである。

本書は同じような話の繰り返しが多く、文章もお世辞にも読みやすいものではない。しかし老人の昔話を聞いているつもりで読んで行くと、時間を忘れさせるほど内容が面白い。「本当にそんなことが

あったのだろうか」とあきれ程開けっぴろげの性風俗が語られている。それは、彼が「よそ」からの採訪者ではなく、取材対象となる地域・集団にどっぷり浸かっているから、取材対象者から「本音」を引き出すことができたのだろう(刑務所や留置場・拘置所までが民俗学の「フィールド」になってしまうのである)。東京帝大法科卒にして元農商務省官吏の柳田國男にはこのような結果は絶対に引き出せない。赤松が「柳田民俗学」を批判するのはこのことなのである。部落の人たちや在日朝鮮の人たちに対する温かみのある記述は、不条理な「常民」からの差別に対する激しい反発が根っこにあると思われる。以前紹介した大学出の渡部義通に対する拘置所・刑務所内での官憲の対応と、赤松に対するそれと比べるとかなり温度差があるような気がするが、赤松もそうした目に見えない差別意識を感じていたからこそ、上記の人々に対する共感を持ったのであろう。

結局、赤松がこの本で言いたかったことは何であったのだろうか。冒頭の、「金儲けをしたいとか、立身出世したいという希望を持っているような人間が読んで、ためになるような本では断じてない」、「労働運動、反差別運動、平和運動など」で「民衆を指導し指揮しようと大志をもつ連中も読まない方がよい」、「民衆の、あるいは市民の、かくされた大きな潜在力を暗示し、その発掘を示唆しているのだ、などと買いかぶるのはやめてもらいたい」という宣言が小気味よい。若い頃は種々の野心を持っていたのかも知れないが、本書執筆時の赤松はそうしたギラギラした心情を完全に取り払っているように見える。しかし、「民衆」とも見做されない「非常民」の中に、最も人間らしい「規範」が存在することを紹介しようという意志は確かに感じ取れるのである。その「規範」とは何か。「貸借関係は必ず清算する」、「自分の行為に責任を持つ」といったことであろう。言葉にしてしまうと味気ないが、本書ではその具体例が延々と紹介されている。ちなみに前者について説明を補足するならば、困った人が回りにいれば手を貸してやるが、貸してもらった者は必ず何等かの形で恩を返す(等価でなくてもよい)という不文律が、国家からも一般社会からも恩恵を受けることがなかった「非常民」の生活を支えていた、ということである。

なお、この本の「解説」を担当したのがドイツ中世史専攻の堅物・阿部謹也であるという点が一層興味深い。『阿部謹也自伝』(新潮社2005年)を読む限り、阿部は赤松と対極にある人物なのである。鎌倉に別荘を持つ家に生まれ、長じては一橋大学の学長となっている。そして、数か国語を操る国際人である。しかし狭い日本の学者の「世間」には、なじめなかったようで、史学研究者や学内の同僚たちと種々のトラブルを起こしている。惻惻で合理的精神旺盛な故かもしれない。そのような阿部にとって、この『非常民の民俗文化』は目を洗われるような新鮮な発見に満ち溢れ、多くの刺激を受けたことであろう。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目次

■心に残る先学の人生記録 一読書日記から一(第8回) 大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第178回) 丸尾弘介 …3
■考古学の履歴書 カナダで米寿をむかえました(第5回) 井川史子 …2	■考古学者の書棚 「古人骨は語る 一骨考古学ことはじめ一」 三好愛美 …4

考古学の履歴書

カナダで米寿をむかえました(第5回) ————— Fumiko Ikawa-Smith(井川史子)

5. エジプト廻りで久しぶりの帰国

カナダに永住者として入国したのは1960年の年末、カナダ人の夫フィリップがトロント大学に就職することになったので、生後6ヶ月の長男、10歳の老猫、家財道具一切をボロ車とレンタルのトレーラーに積み込んで、大雪の中を北上した。ニアガラで国境をこえて目的地についた時には、車のトランクの片隅においたオムツ入れのビニール袋が大きな氷塊になっていた。

年が明けて私共がトロントに落ち着き始めていたころ、地球の反対側では洪水制御と農地開発のためナイル河上流のアスワンに新しくダムを建造することを計画していた。ダム建造も大事業だが、アブシンベル遺跡などダムによって水没または破壊される文化財の保護や、水没する地域の集落を移動する移転先の文化財を緊急事前調査することなど当該国のエジプトとスダンだけでは手に負えない大仕事なので、ユネスコが調整して諸国から考古学調査団を派遣することになった。カナダ政府もそれに参与し、トロント大学に就職したばかりのフィリップ・スミス率いるささやかな調査団を派遣することになった。

フィリップは1961-62年の年末一年始を利用して予備調査のためアスワンに出向いて現地の状況を観察、アメリカ、フランス、ソ連などからくる調査団の代表者とも会談した結果、カナダの調査団は、エール大学の動物学者が率いるアメリカの調査団と共同で、アスワンから約50km下流にあるコモンボ平原(Kom Ombo)の旧石器時代の遺跡群を調査することになった。現在この地域は砂漠だが砂に埋もれている化石からみたとすると1万年以前は動植物相も豊かで、これを対象にした狩猟・採集民の旧石器文化がいくつか存在していたらしいことが1920年代にアマチュア考古学者が採集した遺物から知られていた。ダム建造後は砂漠を灌漑して農地として開発し、ダムで水没する地域の集落をこのあたりに移動しようという構想なので、その前にこの地に存在した旧石器文化の様相をできるだけ保存したいという意図だった。

カナダ・アメリカ合同調査団の本調査は1962年の秋から翌63年の春にかけて行なう予定なので、これを目指してスミス一家は62年8月にトロントを出発した。発掘用の車輛や道具など荷物が多いため移動には飛行機より船舶の方が適当。地中海に面したアレキサンドリアからエジプトに入国し、首都カイロで事務手続のため一月ほど滞在したのちアスワンにむかった。アスワンでは私ども一家とアメリカ調査団のリーダーの家族はエジプトの文化財を管轄する官庁が調達してくれた宿舎に合宿、調査員はあちこちのホテルや民家に分宿して調査がはじまった。1920年代の採集品から多様な石器文化があるらしいことはわかっていたが、調査の結果、少なくとも5種類の石器文化を確認でき、更新世末期のアフリカ東北部の状況について新しい情報を得ることができた。フィリップは発掘の成果についていくつかの論文を発表している。

4月にコモンボでの発掘調査を修了、出土品を荷作りしてカイロに送り出し、私どもは車でナイル沿岸を下ってカイロにむかう。その途上ルクソルの神殿や「王陵の谷」などの史跡を見学した。カイロではまた、発掘調査終了に関する事務や出国手続きなどに時間がかかって出国の準備が完了したのは5月の末だった。

当時の入国管理規則の関係で、私は1955年にアメリカ留学のために出国して以来一度も帰国していない。留学生ではなくなっているの、戻ったらアメリカに再入国出来ないからだ。カナ

ダ永住者になって、日本からの再出国もカナダへの再入国も可能になったので、エジプトからの帰途は日本に寄って、考古学情報を更新すると同時に、フィリップとダグラスを私の家族に紹介することを計画していた。ポートサイドからデンマークの貨物船に乗船、スエズ運河を経て紅海をくだり、インド洋にでた。マレー半島のペナン、バン



▲帝釈峡にて 左から、フィリップ、史子、ダグラス、杉原先生

コック、サイゴン、香港などに寄港して、横浜に着いたのは7月4日。寄港地で貨物船が荷揚げ、荷積みをしている間、乗客は上陸して市街・史跡の観光をする。貨物船の乗客は10名不足で私たち以外はすべて退職後の方々の方だった。ゆっくりした旅程は時間の制約にとらわれないシニアに向いていると同時に、私たちにとっても発掘後の休養に最適だった。子供は3歳のダグラスひとり、船内のペットのようになって、上のデッキにあるオフィスから船底に近いところの作業員たちのたまり場まで自由に駆けまわらせてもらっていた。

日本には7月初旬から8月半ばまで一ヶ月半ばかり滞在した。当時私の両親は堺市に住んでいたが、妹夫婦の家が横浜にあったので、そこをしばらく本拠とさせてもらって、東京付近の研究機関や遺跡をたずねた。数年前に論文を共著させていただいた芹沢長介先生に初めてお目にかかり、先生のご案内で、岩宿、権現山、不二山などの遺跡を見学し、相沢忠洋さんのお宅へもつれていっていただいて、蒐集された遺物を見せていただいた。権現山遺跡についていくつか論文を書いたマリナーも実は遺跡へは来ていないから、権現山遺跡を実際に見た外国人の考古学者はフィリップが初めてだと相沢さんにいわれて、彼は喜んでいました。

明治大学にも参上して杉原壮介先生に3年ぶりで再会した際、広島縣の名勝地、帝釈峡の遺跡群の調査計画のことをうかがったので、発掘調査を見学させていただくことにした。この写真の撮影者は当時明大考古学教室助手、後に同大学の学長になられた戸沢允則氏だったとおもう。このようなご縁で1965年に杉原先生の編集で河出書房新社から出版された『先土器時代』に「西南ヨーロッパにおける旧石器時代研究の現状」をフィリップが書き、私が日本語に訳して寄稿させていただいた。

略歴

1930年	神戸市長田村房王寺谷【現在：神戸市長田区房王寺町】に生れる
1948年	奈良女子高等師範学校附属高等学校卒業【現：奈良女子大学付属高等学校】
1953年	津田塾大学英文学科卒業
1953-54年	東京都立大学【現：首都大学東京】社会学研究室助手補
1954-55年	東京都立大学大学院社会科学研究所(社会人類学専攻)修士課程
1955年	フルブライト奨学生としてハーヴァード大学に留学
1958年	ロードリア大学(ハーヴァード大学の女子部【現在ハーヴァード大学に合流】)修士(人類学)
1958年	ロードリア大学 博士課程終了(人類学)
	1974年にハーヴァード大学人類学部に博士論文を提出、PhD授与
1964-66年	トロント大学人文学部人類学科 非常勤講師
1967-79年	マギル大学人文学部人類学科 非常勤教員
1970-2003年	マギル大学人文学部人類学科 専任教員;2009年以来名誉教授
1999-2000, 2004-2007年	カナダ日本学会会長
2004-2012年	東亜考古学会会長
2005年	瑞宝小授章
2017年	カナダ日本学会ライフタイムサービス賞

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。

Uレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 178

大内氏館跡 ～山口県山口市～

丸尾 弘介

私が紹介するのは、山口県山口市に所在する大内氏館跡(以下、館跡)である。館跡は、中世の周防山口を拠点に活躍した守護大名大内氏の居館跡で、昭和34年(1959)に大内氏ゆかりの3遺跡(築山跡・高嶺城跡・凌雲寺跡)とともに「大内氏遺跡附凌雲寺跡」(史跡大内氏遺跡)として国史跡に指定されている。館跡の史跡指定地は一辺約160mの方形をしており、面積は約24,000㎡である。

館跡は、山口盆地を貫流する梶野川の一支流である一の坂川が形成した扇状地の扇中央部に位置する。山口市の市街地に位置し、市役所から直線距離にして800m程の場所にある。館跡の中央には、大内氏滅亡後に毛利氏により建立された龍福寺が存在する。

山口市では、昭和53年(1978)から館跡の発掘調査を継続的に実施し、現在までに37回の調査を行っている。これまでの発掘調査成果から、館は14世紀末～15世紀初頭に設置され16世紀中頃まで機能したこと、周囲は堀と堀を巡らす構造であったこと、少なくとも5度の改修が行われ屋敷地の広さが変化していること、館内が内郭と外郭に分割されること、少なくとも4つの庭園が存在したこと、一度に大量の土師器皿を使用した儀礼や宴会が行われていたことなどが明らかになっている。

私が館跡の調査に携わったのは市役所に入庁して1年目の時で、しかも山口市での初めての現場であった。私はそれまで他の自治体で嘱託職員として発掘調査に携わってきたが、どれも開発に関わるもので史跡を調査したことはなかった。先輩と組んでの現場であったが、多くのことを学ぶことができた。まず学んだのは調査する遺構面をどの時期に設定するかである。先述のように館跡は昭和53年から発掘調査を行っており、14世紀末～16世紀中頃までの約150年間、屋敷内の改修を行いながら機能し続けていたことが明らかになっており、遺構面が複数存在することがわかっている。あわせて、館跡では平成9年度から復元整備を行っており、整備対象時期を館の最盛期(16世紀前半～中頃)と定めていることから、その時期の遺構面での調査を行う必要があった。さらに、遺構の掘り込みは最小限に留めつつそこから最大限の情報を引き出すこと、過去の調査を踏まえつつ現在の調査に活かすことなど多くを学んだ。とはいっても、その当時は調査についていくことで精一杯で、調査中にそのようなことを考えながら十分な解釈が行えていたかは自信がない。

この調査は館跡で36回目の調査で、史跡地の中で公有地化された部分のうちの最後の未調査地点であった。ここは史跡北東部で、過去の調査で廃棄土坑や方形石組が多く見つかったことなどから、ハレとケの概念でいえば、館の中でもケの空間だと想定されていた。この調査においても過去の調査と同様に廃棄土坑や方形石組が検出されるものと考えられ、館跡内での調査は一段落のはずであった。しかし、調査では堀や廃棄土坑・石組水路・方形石組などの他に、石敷や

石組からなる庭園状の遺構を検出した。この庭園状遺構は幅2m・長さ11mのトレンチの中で発見された。当初は堀のような落込みと考えて掘削していたが、落込みの底の方から拳大の扁平な石が多く見つかり、それらがどうも敷き詰められているようにぎっしりと検出され始めたこと、さらに、容易に動かすことのできない大きな石組も検出されたことから、人為的に構築された庭園状の遺構であると想定された。なお、私はこの時はまだこれが庭園状遺構だと認識できず、周囲に言われるがままこれが庭園の一部を構成するのかなと思うに過ぎなかった。

この36次調査での発見を受け、庭園状遺構の全容を明らかにするため、翌年度に37次調査をすることとなったが、それに先立ち、庭園状遺構などの埋存状況を確認するため、地中レーダー探査を実施した。これにより庭園状遺構の広がりがある程度予測することができたとともに、それ以外の方角石組や石組水路・堀といった遺構の分布状況などもある程度把握することができた。この成果をもとに37次調査区の範囲を設定し調査を行った。実際の調査では、探査成果は概ね合っていたものの、それにそぐわない箇所があったり、自身の探査成果の読み解きが浅く、発掘して初めてデータが示していた意味を理解したりするなど、成果を十分に活用できていなかった部分があった。とはいっても、37次調査で庭園状遺構の全容が明らかとなり、館跡で4例目の庭園跡となった。

36・37次調査は館跡の史跡整備事業などで実施してきた発掘調査の最終であったため、報告書ではこれまでの調査成果の総括も行った。この総括をまとめるにあたって、過去の調査図面を見直したり、成果を再検討したりするなど、これまでに館跡の調査に関わってきた調査員の仕事を振り返ることを行った。それにより再検討を要する内容もあったが、その反面、調査所見の確かさや調査水準の高さに感心することの方が多かった。逆に自分の調査は今後再検討された際にどのような評価をされるのだろうか、検討に耐えうる調査となっているだろうかと不安になったりもした。この経験は今でもとても役立っていて、史跡の発掘であれ、開発の発掘であれ、過去の調査成果を積み重ねていながら遺跡の様相を明らかにしていくという過程は同じで、だからこそ一つ一つの調査を丁寧に行っていかなければいけないと肝に銘じている。

2019年は、館跡を含めた大内氏遺跡が史跡指定されて60年という節目の年に当たる。これに関連して講演会や企画展などが予定されている。市内外から多くの方々にお越しいただき、大内氏遺跡の魅力に触れていただきたい。また、大内氏遺跡では館跡が先行して調査が行われ整備されてきたが、他の遺跡でも調査・整備が進んできている。今後、これら4つの遺跡をどうつなげていくか、我々調査員の腕の見せ所である。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは藤田慎一さんです。

考古学者の書棚

「古人骨は語る -骨考古学ことはじめ-」

片山一道／同朋舎出版(1990)・角川書店(1999)

三好 愛美

人骨は、解剖学・法医学・疫学などの様々な分野が関連し、形質人類学(自然人類学)もその1つである。遺跡から出土する古人骨は、主に形質人類学の対象である。発掘調査でみつかることのある古人骨は、考古学も関係することから、人骨初心者に向けての入門書であるこの本を選んだ。内容について簡単に紹介する。

本書は7章から構成されている。

- 第一章 骨考古学ことはじめ
- 第二章 人の骨について
- 第三章 古人骨の個人識別
- 第四章 古人骨から探る日常的生業活動
- 第五章 古人骨から探る健康白書
- 第六章 古人骨から探る人口現象
- 第七章 骨考古学のすすめ

第一章では、本のタイトルで使われており、各章に出てくる『骨考古学』という言葉の説明からはじまる。骨考古学とは、形質人類学の方法で古人骨から、当時の人々の生活スタイルを解読するものであり、考古学と目的は変わらないのだと述べられている。加えて、古人骨と考古学との関係、古人骨を研究する意義、古人骨を観察する前段階の作業について書かれているほか、日本における出土状況についても簡単に触れられている。骨考古学の紹介を兼ねて、広い視野で概要がまとめられている章となっている。

第二章では、古人骨を観察するうえで必要な基礎知識について簡単にまとめられている。骨の数・種類・骨の表面と内部のつくりなどについてであり、骨の数は成長とともに数が減ること、骨は育った環境の影響を受けて形成されていくとも書かれている。また、完成した後にも各骨の一部は、常に新しいものに置き換わっていくということにも触れられている。ここまでは、第三章以降へ向けての導入部分となっている。

第三章から本書の主題に入る。まず、骨からは様々な情報が得られるのだ。この章では、性別・年齢(死亡年齢)・体つきと顔立ちについてまとめられている。性別についてだが、人は骨格の数で男女の違いはなく、それぞれの骨の形も、基本的には同じ形をしている。よって、骨格の様子から、相対的に判断しなければならないのだ。つまり、骨格が「男っぽい」か「女っぽい」ということである。数ある骨の中でも、骨盤と頭蓋骨からは性別が推定しやすいのだ。骨盤は、妊娠・出産に影響のある骨であり、頭蓋骨は、顔立ちに関わるからである。年齢(死亡年齢)は、生まれてから骨が形成されるまでの時期で推定がしやすく、形成後の大人の骨は難しくなる。離れていた骨が、成長にともなっていくついでいき、やがて一つの骨になるのである。その状況を観察し、どの年齢段階であるかを判断する。骨格形成後の骨の変化は、生活環境による影響によるものが多いため、推定される年齢幅が広がる。さらに、身長推定の方法や頭蓋骨の顔立ち、人的な頭蓋の変形などにも触れられている。

第四章は、日ごろとっている姿勢や運動によって生じる骨の変化についてである(ヘルニアや野球肩などがある)。骨の変化から、生前の生活の様子を古人骨から推測するのである。しゃがみこんだ姿勢を習慣的にとっていると、足首の前側に踵踞面という特別な関節面が現れるのだが、縄文人の骨では多く出現する。このことから、休憩や作業をする時にこの姿勢をとっていたのだと推定

できる。肩関節にも似たような仕組みの変化が現れ、これが利き腕の判定につながるということも紹介されている。縄文人でもう一例あげると、耳の外側の外耳道にできる異常な骨がある。いわゆる「水泳者耳」や「サーファー耳」である。縄文人の耳では多くみられる。この変化は、耳の穴に海水がかかって、骨に刺激を与えることで生じることから、漁労活動を行っていたということが推定できる。他にも、寛骨という骨盤を形成する骨には出産痕が現れる。これは出産の際に、胎児が骨盤の内側を通ることで、骨が動くことで生じる痕跡である。

第五章は、古人骨に残された病的な変化を研究する、古病理学的アプローチと、生前の健康状態や栄養状態、食物の内容や調理法に関して研究する、古栄養学的アプローチについてである。骨の病的変化の原因には、感染症・慢性疾患・骨折・虫歯がある。感染症の梅毒は、江戸時代の骨格を調べると、江戸の人口の四分の一にあたるほどの人が患っていたことがわかるのだという。人々の梅毒に対する抵抗力がまだ低かった当時、猛威を振るったのであろう。江戸の人々の骨は、眼窩の上壁(眼球の入っている穴の天井部)にたくさんの小さい穴や櫛状の穴があいているものが多い。成長時の鉄分欠乏性貧血の痕跡であり、生活レベルがあまりいいものではなく、貧血が珍しいものではなかったのだろう。骨折の例としては、ポリネシアでみつかる人骨では、生前に鼻を骨折している男性が異常に多いことがあげられている。ボクシングなどのゲームが盛んだっただろうと推測されている。年齢や性別、骨折箇所について調べると、生活環境や人々の気質についてのヒントが得られるのでは、と筆者は述べている。古人骨の虫歯について調べると、糖分の多いデンプン質の米が主体である稲作開始後の弥生時代と縄文時代の虫歯の割合は、たいして差がないことがわかる。このことから、雑穀や根菜を主体とした農業が既に発達していたのか、デンプン質のドングリ等の食物への依存率が高かったのだらうと、筆者は想定している。

第六章の内容は、現代社会を対象にしている人口学の方法と目的を、先史古代の場合に当てはめた、古人口学についてである。

第七章には、骨考古学の現状と将来、問題点がまとめられているほか、考古学における古人骨のとらえられ方について書かれている。古人骨が出土する現場に居合わせることが多いのは、遺跡の発掘調査を行っている考古学の人間の方である。しかし、出土した古人骨は形質人類学をはじめとする人類学の人間にまかせっきりになっている。このような現状を筆者は嘆くと共に、疎遠であった人骨が気になる対象となり、やがて面白いと感じるようになれば、という狙いもあると述べている。

私個人の印象であるが、筆者の異なる出土人骨について書かれた本でも、そのほとんどで同様の意見が綴られている気がする。土器や木製品など、人々が使っていたモノは対象として、それを作成・使用していたヒトの方に着目しないのは、もったいないのではないかな。上記で紹介したように、骨を観察すれば様々な情報が得られるのだから。

アルカ通信 No.185

発行日 2019年2月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801
 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp
 URL : http://www.aruka.co.jp